

2022-23年度レギュラーコースカリキュラム報告

—アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、①10カ月間にわたるレギュラーコース、②夏期集中コース、③夏期漢文コースの3種類の集中日本語教育が行われている。本稿は①のレギュラーコースについて報告するものであり、他については[佐藤 \(2023\)](#) と [大竹 \(2023\)](#) を参照されたい。

レギュラーコースの期間は2022年9月5日から2023年6月9日までの40週間で、学生数は62名（うち博士課程16名修士課程13名その他33名）、指導にあたった教員は常勤教員9名、非常勤教員10名であった。

2 レギュラーコースの概要

40週間のレギュラーコースは4学期に分かれており、各学期の間には休みがある。今年度の第1学期は9月5日から10月28日までの8週間、第2学期は11月7日から12月23日の7週間、第3学期は1月16日から3月10日までの8週間、第4学期は3月27日から6月9日までの11週間で実施された。第1学期と第2学期を「前期」、第3学期と第4学期を「後期」と呼んでいる。前期は主に日本語の構造や知識の習得に比重がおかれ、後期は各学生の専門や関心領域に近い内容に焦点をあてた科目を選択することが可能になるという点に違いがある。

毎日の授業は午前と午後に分かれており、午前の授業は文法など言語の形式面を重視し、午後の授業は聴解、読解、発話等の総合的な言語の運用力を高めることを目的としている。そのため、「前期」にあたる第1学期の午前は「文法」「待遇表現」、午後は「総合運用Ⅰ」という科目が設定され、第2学期の午前は「接続表現」「統合日本語Ⅰ」、午後は「総合運用Ⅱ」が実施される。ここまでは全学生共通である。「後期」にあたる第3学期は、午前は「統合日本語Ⅱ」が共通であるが、「選択A」「選択B」そして午後の「総合運用Ⅲ」は各学生が自分の関心領域に合わせて科目を選択することが可能である。さらに第4学期の午前は第3学期と同じコースが設定され、午後は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「日本語文法強化クラス」のいずれか希望するものを一つ選択することができる。第3・第4学期には、随意に履修できる文語文法等のオプション授業も用意されている（「選択C」）。

2022-2023年度 40週間のレギュラーコース日程

週	10:00-11:50 午前クラス授業	13:20-15:00 午後クラス授業 水曜は午後のクラスなし	
1	オリエンテーション・試験・面談	面談・避難訓練など	↑
2	文法 Japanese Grammar	総合運用 I Applied Japanese Skills I	
3			
4			1学期
5			9/5-10/28
6			8週間
7			↓
8	待遇表現 Formal Expressions		↓
9	秋休み1週間 10月29日(土)～11月6日(日)		
10	接続表現 Conjunctive Expressions	総合運用 II Applied Japanese Skills II	↑
11	統合日本語 I IJ: Integrated Japanese Advanced Course I		
12			2学期
13			11/7-12/23
14			7週間
15			
16	↓		
17-19	冬休み3週間 12月24日(土)～1月15日(日)		
20	統合 日本語 II IJ II	総合運用 III Applied Japanese Skills III	↑
21			
22			3学期
23			1/16-3/10
24			8週間
25			
26			
27		↓	
28-29	春休み2週間 3月11日(土)～3月26日(日)		
30	統合 日本語 III IJ III	プロジェクトワーク/ クラス授業/個別指導 Project Work/Class/ Directed Research	↑
31			
32			
33			4学期
34			3/27-6/9
35	GW休み1週間 4月29日(土)～5月7日(日)		11週間
36	統合 日本語 III IJ III	プロジェクトワークなど	授業は実質
37	選択 A		8週間
38	B		
39	試験5/29月、発表準備	試験5/29月、発表準備	
40	発表6/5-6月火、面談6/9金	発表6/5-6月火、面談6/9金	↓

3 今年度の特殊事情

3-1 登校日・出勤日の制限

今年度は開始当初から学生が日本入国を果たしていたことで海外からオンライン授業に参加する受講生のための時差考慮が不要となり、全ての授業を通常的时间割で開講することができた。ただし、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、学生の登校日数ならびに教員の出勤日数を制限した。登校・出勤しない日は、Zoom¹を使って授業をオンラインで行った。制限のしかたは、学生と教員をそれぞれ「月木組」「火金組」と称する2つのグループに分け、グループごとに登校日を変えるというものである。これにより、1度にキャンパスに集まる人数を通常の前半に抑えるとともに、他のグループの学生・教員とはキャンパスでの接触がないようにした²。

登校日の数とキャンパスに集まる人数を減らす措置は、年度の進行に従って徐々に緩和された。登校日数は第1学期は週に2日であったが、第2学期は週に3日、そして第3・第4学期は週に4日となった。学生教職員のグループ分けは第2学期をもって終了した。この登校・出勤制度を学期ごとに図示すれば以下のようなになる。

第1学期

	月	火	水	木	金
グループ1 (月木組)	登校			登校	
グループ2 (火金組)		登校			登校

第2学期

	月	火	水	木	金
グループ1 (月木組)	登校		登校	登校	
グループ2 (火金組)		登校	登校		登校

第3・第4学期

	月	火	水	木	金
全員	登校	登校	登校		登校

3-2 オンライン教育のために利用したサービス

登校日以外の授業や講演会などのイベントは、昨年度と同様にZoomのミーティングプラットフォーム上で行った。Zoomは学生との個人面談やインタビュー試験に用いられる場合もあった。年度開始時と第2学期終了時、そして年度終了時の実力試験(9-1-1参照)

にはGoogleフォーム³とQuilgo⁴を併用した。教職員同士の日々のやりとりにはSlack⁵を利用した。Slackは、本校スタンフォードオフィス⁶が学生同士の交流の場を提供するためにも用いられた。また、出勤していない教職員のためのオンライン交流スペースとしてGather⁷を用いたが、感染症対策の緩和で出勤日が増加したことに伴い、利用の機会は減っていった。現時点においてインターネットを通じた教職員同士のやりとりは電子メールとSlack、そしてZoomで事足りている。

学生への連絡事項や授業・イベントスケジュールの提示、そして課題の指示・提出・採点のためには、昨年度に引き続きGoogle Classroom⁸を利用した。全体的な連絡には「連絡掲示板」クラスルームを、そして各クラスごとに1つのクラスルームを設置した⁹。漢字学習プログラムSKIP (9-2参照)と実力試験もそれぞれのクラスルームを用いて運営された。

3-3 ハイブリッド会議用機器の導入

対面授業を欠席した学生が授業を後から視聴できるよう、各教室にはハイブリッド会議用の設備を設置し¹⁰、欠席者が発生した場合に授業を録画した。またこの設備のおかげで、新型コロナウイルスへの感染が発覚して自宅待機をしなければならないなど、体調は問題ないにもかかわらずやむを得ない理由で登校できない学生が対面授業を「ライブビューイング」できる機会も作る事ができた。

上述の設備は対面授業の欠席者もオンラインで参加できるよういわゆるハイフレックス型¹¹授業を行うことを睨んで導入したものだが、昨年度来の試用の結果、それは困難であることが判明した。教員と学生の、あるいは学生同士の議論が頻繁に発生し、しかも教員が発話ターンを完全には統制せず学生の自主的な発言を期待する本センターの授業では、オンラインの学生を教室にいる学生と同等に参加させることはやはり難しかったのである。特に、オンライン参加者と対面参加者が組んでペアワークを行うことは授業の円滑な運営と音声の品質にとって大きな妨げとなるため、現実的ではなかった。一方、オンライン参加者は少なくとも教室で交わされている会話を比較的高品質で、しかも映像付きで聞き取ることができた。そこで、対面で参加できない授業について過大な期待を抱かれることがないように、ハイフレックス型ではなく「対面授業のライブビューイング」は可能、と学生に案内したわけである。

ただ、実際にライブビューイング授業を行ってみると、オンライン参加者を発言させたりクラス全体の議論に加わせたりすることは不可能ではなかった。授業の運営方法によっては（ペアワークを行わないなどすれば）、ほぼハイフレックス型の授業を行うことができた場合も少なくない。また、教員が濃厚接触者になるなどして対面授業に参加できず、学生は全て教室にいるなか教員だけが自宅からオンラインで授業を行うケースもときおり発生したが、特に深刻な問題は発生しなかった¹²。

3-4 クラス編成

登校日の制限はあったものの、多くの学生がキャンパスに集まって対面授業を行う体制を敷くことができた本年度は、過去2年間の完全オンライン体制において学生間の親近感醸成に配慮が必要だったような状況とは異なる¹³。しかし、3-1で述べたように学生は第2学期終了まで「月木組」と「火金組」の2つのグループに分けられ、グループの異なる学生同士がキャンパスで顔を合わせることはなかったため、その期間中に全学生がクラスの別なくキャンパスで交流する機会が損なわれたことは確かである。

「月木組」には、第1学期冒頭に午前の文法クラスを編成した際、日本語運用能力が比較的高い4クラスを割り当てた。そして基礎的な運用力の鍛錬が必要な5クラスを「火金組」とした¹⁴。このグループ分けは第2学期終了まで変更されなかった¹⁵。午後（総合運用Ⅰ・Ⅱ）のクラス分けは、それぞれのグループの中 devenir べく午前クラスの学生・教員とは違うメンバーになるよう配慮した。

4 第1学期の教育内容

月～金曜の午前の授業は最初の5週間を「文法」に、その後の2週間を「待遇表現」にあてた。月・火・木・金曜の午後の授業は「総合運用Ⅰ」を6週間実施した。

4-1 午前の授業内容

4-1-1 文法

第1学期の午前は、中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい文法事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力を向上させた。本センター作成 *Japanese Grammar*、本センター作成 *An Introduction to Advanced Spoken Japanese*、『レベルアップ日本語文法中級』¹⁶のいずれかを、各クラスの日本語習熟度に応じて使用した。また、クラスによっては敬語とその随伴行動の学習準備として本センター作成「プレ待遇表現（動画スキット全4回）」を導入した。22日間44コマをこの指導にあてた。

4-1-2 待遇表現

円滑な人間関係を構築できるよう、敬語とその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を取り上げた。主教材として本センター作成『新 待遇表現』を用いた。9日間18コマを指導にあてた。

4-2 午後の授業内容

4-2-1 総合運用Ⅰ

月・火・木・金曜の「総合運用」は、主として読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、文字通り総合的な日本語運用力の向上を目指した。第1学期は身近で日常的な話題を扱った「経験談」という単元から開始し、自然な話し方に慣れるとともに、既習の文法事項などを総合的に活用する機会を提供した。単元の後には、卒業生が教職員をインタビューしたビデオを参考に学生自身がインタビュー活動を行い、内容について授業で発表を行った。続いて新聞やニュースを教材とする社会性をおびた単元に進み、日本事情や時事的話題に関する語彙・表現の習得と運用力向上を促した。20日間40コマをあてた。

5 第2学期の教育内容

月～金曜の午前の授業で「接続表現」を2週間、その後「統合日本語Ⅰ」を5週間、月・火・木・金曜の午後に「総合運用Ⅱ」を7週間実施した。

5-1 午前の授業内容

5-1-1 接続表現

接続詞に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方（複段落の作成）について指導した。教材として本センター作成『接続表現』を用いた。10日間20コマをこの指導にあてた。

5-1-2 統合日本語Ⅰ

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、本センター作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』を用いた。各課は同一の話題で構成される「文章編」と「会話編」である。「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した。上巻第1～第3課を第2学期に扱った。指導には23日間46コマをあてた。このうち12月21日はミニ発表会を行い、「統合日本語Ⅰ」で学んだ知識や技能を運用する機会とした。

5-2 午後の授業内容

5-2-1 総合運用Ⅱ

月・火・木・金曜午後の「総合運用Ⅱ」では、現代社会の問題をめぐる生の教材、例えば新聞・雑誌記事や報道番組などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、類似した一般的な話題についても日本人と話し合える能力の獲得を目指した。教材は、話題シラバスのモジュール型教材群「外国人と国籍」「文化の発信」「ものづくり」「教育」「現代の若者たち」「働き方」「地球環境」「差別と人権」「情報化社会」の中から学生の興味や関心あるいは必要性に応じて各クラスごとに選び、授業進度も各クラスの理解度に合わせて調整した。ただし、「外国人と国籍」に関しては全クラス必修とした。25日間50コマを指導にあてた。またこの中で、教室を出て学生・教員の親睦を図る校外学習の機会を1日(2コマ)設けた。

6 第3学期の授業内容

冬休みが明けた1月から第3学期が始まり、各学生の専門・興味・関心・必要性に応じた選択授業が増える。

午前は月・水曜に「選択A」、火曜に「選択B」、木・金曜に「統合日本語Ⅱ」を実施した。午後は月・火・木・金曜に「総合運用Ⅲ」、水曜に随意科目の「選択C」を実施した。

6-1 午前の授業内容

6-1-1 統合日本語Ⅱ

第3学期に全学生が共通の教材で学ぶ授業はこの「統合日本語Ⅱ」のみである。本センター作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』下巻を教材に、第4・第5課を扱った。木・金曜の週2日、計15日間30コマ実施した。最終週の2日間はミニ発表会を行った。

6-1-2 選択A

自分の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する言語面の能力育成に取り組む科目である。学生には第3・第4学期を通じて同じコースを継続履修するよう奨励した。コース選択に迷う学生のため、第2学期中の11月25日午後に各コースの説明と質問受付の機会を設けた。本年度は「文化人類学」「政治学」「文学」「歴史学」「法律」「日本学」の6コースを開設した。月・水曜、計16日間32コマ実施した。

・文化人類学

受講生の専門、関心を考慮し、第3学期は「フィールドワーク」「植民地とネイティブ」「伝統文化と記憶」「グローバル化」「テクノロジーと人類」というテーマを設定し、具体的な事象から抽象的话题に至る専門性の高い読み物を教材とした。第4学期は各学生が自己のテーマにそった素材を提供し話し合いを進めた。校外学習として、三菱みなとみらい技術館とYUMESAKI GALLERYを見学した。

・政治学

大学生向けの教科書を読み、第3学期は日本政治、第4学期は国際政治や日本外交に関する理解を深めた。授業では読み物の内容確認や、学生から出された話題を中心に議論を行った。また、学生が自分で選んだニュースを発表し、議論を進める時間を設けた。第4学期には国会議事堂、横浜市議会、領土・主権展示館を見学した。

・文学

明治から現代までの短編小説および関連する評論を取り上げ、様々な観点から作品を分析し、話し合いを行った。おおむね2~3回の授業で1作品を読んだ。

・歴史学

日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ね、語彙・表現の拡充を図った。第3学期から第4学期前半は学生の興味・関心・必要性に応じて、専門書・論文および歴史的史料を素材とする読解練習を行った。第4学期後半は、各学生が自分の研究テーマに関する資料を選び、2時間の授業を構成する取り組みを行った。また、横浜市中心図書館、国立国会図書館を訪れ、図書館の使い方と資料の探し方を体験した。

なお、今年度は歴史学クラスの中に美術史グループを編成し、前半の専門書・論文読解の授業のうち9回は美術史グループをクラスから独立させて、独自の教材を扱った。歴史史料読解、図書館訪問、後半の学生主導授業は、合同で実施した。

・法律

憲法、民法を中心に、国際法、刑法、知財法、会社法の一部を取り上げ、条文・判例を自力で理解できる技能を育成することで、法律に関わる話題について自ら調べ、それを説明し、自説を展開できるよう指導した。

・日本学

専門が定まっていない学生、幅広い分野で活かせる日本語力を追求したい学生などを対象に設けられた選択科目である。選択Aの専門分野を中心に日本研究や日本についての多

種多様な教材を用い、知識を蓄え、理解を深めたのち、互いに話し合うことで日本語力の定着を図った。

6-1-3 選択B

選択Bでは、必要とされるあるいは弱点と思われる日本語力の増強のために、「話す」「聴く」「読む」「職場の日本語」の4コースを開講した。火曜の計8日間16コマをあてた。

・話す

「話す」コースは第3学期と第4学期に行われた。本センター作成『洗練された会話のための表現集』を共通教材とし、討論におけるフォーマルな表現の習得に努めた。討論、ディベート、音読、即時的なスピーチ、敬語を使った会話練習などの活動、発音・イントネーションの指導などを行った。

・聴く

授業前半は、日本語の音の特徴を復習し、聴き取った音声と文字表記を結びつける練習を行った。授業後半は、メモを取りながらまとまりのある発話を聞き、聞き取れなかったところを確認した後、内容を再生する活動を行った。

・読む

中学受験、高校受験、大学受験の問題を中心に、日本の学校教育ではどのような読解力が求められているかを体感し、文章の背景の理解と読解力を上げることを目指した。授業はペアワークを中心に相互理解を行った。

・職場の日本語

ビジネス場面での待遇表現の位置づけで、さまざまな状況における会話練習を行った。また、ビジネス上のコミュニケーション問題の事例を読み、問題の所在、解決方法について考え、ディスカッションを行った。

6-2 午後の授業内容

月・火・木・金曜の午後は「総合運用Ⅲ」とし、「現代史」「大衆文化」「ビジネス社会」の3つの中から1コースを選択する。いずれのコースも記事の読解、ビデオの視聴、そしてその内容についての討論などの活動が盛り込まれている。計25日間50コマ実施した。2月6日には日本で活躍する卒業生を招き、全学生を対象としてトークショーを開催した¹⁷。

6-2-1 総合運用Ⅲ

・現代史

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の近現代史を、「戦前の日本1900-45」「敗戦と復興1945-55」「高度成長1955-70」「現代の日本1970-95」の4期に分け、ビデオと読み物で概観した。また、中学・高校の歴史教科書を比較するグループ・プロジェクトを実施し、最終週には、学生各自が1995年以降の日本社会について関心を持つ話題を選んで発表する機会を設けた。

・大衆文化

広い意味での日本の「大衆文化」に関して、専門家によって書かれた論文を読み、議論ができるようになることを目標とした。「CM」「マンガと教育」「映画とオタク」「言葉と音楽」という各テーマで資料を読み、映像を見て話し合ったうえで、学生が発表する時間を設けた。校外学習として、劇場で公開されている日本映画を鑑賞する活動を行った。コースの最後には、学びを統合する目的で、学生各自が「文化」と思う事象をとりあげ発表した。

・ビジネス社会

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「創業者と起業家」「アベノミクス」「SDGs」「EV（電気自動車）」「決算書の読み方」などの話題を取り上げた。また、NHKNEWSおはよう日本の「おはBiz」から、毎回一人ずつ学生が興味を持った記事を紹介し、話し合いを行った。

6-2-2 選択C

第3・第4学期には随意選択科目として「文語文法」「漢文」「ビジネス」の3コースを開設し、水曜4限に実施した。「ビジネス」は外部から招いた専門家が指導に当たった。

・文語文法

文語文法の用語や歴史的仮名遣いから導入し、動詞・形容詞・助動詞の指導に進み、文語作品の部分的読解も並行して行った。

・漢文

漢文資料を読む基礎訓練として漢文や漢文体の素材を取り上げ、読み下しと解釈の練習を行った。まず漢文の基礎構文をおさえ、それを応用して短い文章を読んだ。

・ビジネス

「日本の産業と金融」を主題に、新聞や雑誌の記事を素材として、ビジネス界の実情にも触れながら、日本経済の現在に至る経緯を紹介し、今後の展望と課題について講義した。元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が指導に当たった。

7 第4学期の教育内容

プログラム最終第4学期の午前は、第3学期午前と同様の形態をとる。「選択A」は同じコースを第3学期から継続履修するが、「選択B」は「話す」のみコースの選択肢として継続し、「書く」「就活の日本語」「現代小説」「日本文化論」を加えた。月・水曜に「選択A」、火曜に「選択B」、木・金曜に「統合日本語Ⅲ」を実施した。

午前は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「文法強化クラス」のいずれか1つの形態を選択し、学習を進めた。プロジェクトワークは各選択者ごとに担当教員と相談の上で任意の時間に週1コマ(50分)実施した。「文法強化クラス」は火・金曜の午後に実施した。随意科目である「選択C」は第3学期と同じコースが用意され、第3学期と同じく水曜に開講した。

7-1 午前の授業内容

7-1-1 統合日本語Ⅲ

木・金曜に実施した「統合日本語Ⅲ」では、日本語の主に形式面の補強・拡充・総仕上げを目指した。学生の到達度、興味、要望に応じて各クラスでそれぞれに教材を選択し、内容に関連した発話活動などを通じて既習事項を総ざらいし、日本語の知識をより確実なものにするとともに、上級日本語話者が知っておくべき事項の欠落を補うなどした。16日間32コマをあてた。

7-1-2 選択A

第3学期と同じコースを継続履修する。16日間32コマをあてた。各コースの内容については6-1-2を参照されたい。

7-1-3 選択B

第4学期の火曜は、「話す」「書く」「就活の日本語」「日本文化論」「現代小説」の計5コースを開講した。第3学期同様日本語力の増強を図ることも可能であるし、また、まとまった内容のものを読むという目的で「日本文化論」「現代小説」を選択することもできる。8日間16コマをあてた。（「話す」コースについては6-1-3参照）。

・書く

随筆から小論文まで、幅広い分野の文章表現力の習得を目的とした。毎週、宿題として400字程度の文章を書き、授業ではそれを学生間で検討・批評した。また、文章の推敲を目的とした教材を用いて毎週異なる視点から、日本語の文章技術について学んだ。

・就活の日本語

就職活動を考えている学生を対象とし、面接の練習、メールの課題提出などを通して、事例に即した解説を加えながら実践指導をした。また、元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が面接官となり、模擬就職面接を行った。(6-2-2「選択Cビジネス」参照)

・日本文化論

青木保著『日本文化論の変容』の時代区分を理解した上で、中野明著『ナナメ読み日本文化論名著25冊で読み解く日本人のアイデンティティ』を素材とし、様々な日本人論の著作を購読し話し合いをした。また、本文で著者が引用した文献を追加資料として配付し、十分な内容理解を目指した。

・現代小説

現代作家による短編あるいは中編小説を読み、論じた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、向田邦子、江戸川乱歩、宮部みゆき、本谷有希子、川上弘美、小川洋子の作品を扱った。1作品につき短編は1回、中編は2回の授業を費やした。

7-2 午後の授業内容

第4学期の午後は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「文法強化クラス」のいずれかの学習形態を選択して学習を進めた。また第3学期と同様、随意選択科目である「選択C」を開講した。選択Cについては6-2-2を参照されたい。

・プロジェクトワーク

プロジェクトワークでは、各学生が個人またはグループで自己の専門や興味ある分野の主題を選び、教員から個別の指導・助言を受けながら、調査研究や文献の読解などを行う。今年度は39名の学生が選択し、うち4名が2名ずつ2つのグループを結成した。テーマに関しては卒業発表会の内容と重なる部分が多いので、そちらを参照されたい(8 卒業発表会を参照)。学生1人につき週1日、計8コマ(1コマ50分)を指導にあてた。

・グループ学習

特定の日本語課題に対して関心を同じくする者が、数名でグループを構成し学習する。今年度は、日本語能力試験N1の受験準備をするグループ（5名）と、書くスキル強化を目指すグループ（3名）の2つが成立した。

・文法強化クラス

日本語能力試験N1・N2レベルの文法習得を目指して、1回2コマのクラス授業を週に2日、計16日間32コマ行った。市販の問題集を使用して知識の整理、増強を図り、語彙クイズ、文型復習クイズも行った。

8 卒業発表会

卒業発表会は10カ月間にわたる学習の集大成となる催しであり、年度の最終週に举行される。学生は質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、改まった形式の発表をする。今年度は実に4年ぶりに対面での実施となったが、学生数が多かったことから会場を2ヶ所に分け、2日間にわたって開催した¹⁹。

第4学期の午後にプロジェクトワークを選択した学生は、その時間内に卒業発表の準備を進めた。「グループ学習」「文法強化クラス」の学生はミニ発表会などの機会に話した内容を洗練させるなどして卒業発表に仕上げた。発表準備にあたっては学生一人ひとりに割り当てられた担当教員が原稿のチェックを行い、発表の予行演習を指導した（学生1人あたり2コマ分をあてた）。

本センターのウェブサイトにある [「卒業発表会内容紹介」ページ](#)では、過去の年度も含め、題目と要旨を公開しているので参照されたい。

9 通年で実施した学習指導と行事など

9-1 評価

9-1-1 テスト

本コースでの学習成果を測定するため、入学直後と卒業時に実力試験を実施した。文法、読解、聴解、漢字の試験、そして面接形式での発話テストを入学時と卒業時に実施し、入学時にのみ作文のテストを加えた。

昨年度の卒業時と同じく、筆記テストはGoogle FormsとQuilgoを用いて非同期的に実施し、発話テストはZoomを用いて実施した。入学時の作文テストではZoomミーティングに全学生を集合させ、辞書の利用を認めて1時間以内にその場で作文させた。紙に手書きでさ

せるのではなく、Googleドキュメントにタイプして提出させた。

また、第2学期末には「中間実力試験」を実施し、プログラムを半分終えた時点での読解力と聴解力を学生自身が確認できるようにした。問題は、日本語能力試験1級と2級の「聴解」「読解・文法」の過去問題から識別力の高いものを採用し、入学時・卒業時の実力試験と同様にプラットフォームとしてGoogle FormsとQuilgoを用いた。

9-1-2 個人面談

本センターでは入学時の実力試験結果をもとに第1学期のクラスを編成するが、コース開始に先立ち、午前（文法の授業）のクラス担任教師が自分の受け持つ学生と個別に面談し、試験の結果を踏まえて40週にわたる学習の指針などを助言した。第1学期末にも担任と学生とが個別に面談し、その間の学習ぶりを振り返り、新たな課題を設定するなどした。

文法のクラス担任と学生の個人面談の機会はその後も各学期末に設け、最終学期にあたる第4学期には10ヵ月の学習を振り返った。

9-2 漢字学習プログラムSKIP

プログラム期間を通じて、常用漢字習得のための自律学習プログラムSKIP (Special Kanji Intensive Program) を実施している。学生は常用漢字すべてを卒業までに習得できるよう毎日教材を独習し、授業以外の時間にクイズ全156回を受けることとなっている。教材には本センター編集発行の市販教材で、漢字を単独ではなく熟語や例文と共に学習できるよう構成された[Kanji in Context](#)ならびにそのワークブック[Kanji in Context Work Book vol. 1・2 \(ジャパンタイムズ社\)](#)と、それらをWebアプリケーション化した「[WebKIC](#)」を用いた²⁰。

そして、学習を促すために「KIC統一試験」を作成し、実施した²¹。統一試験は、漢字の書き方、読み方等を答えるという問題100問を全学生が受け、点数が6割未満の場合は再試験を受けなければならない。各学期に1～2回、計7回実施した。第1学期と第2学期はGoogle Classroom上で非同期的に行い、第3学期は「総合運用Ⅲ」の時間に対面で、そして第4学期は「統合日本語Ⅲ」の時間内に対面で行った。

クイズあるいは統一試験を受ける際、学生は白紙あるいは自分で印刷した問題用紙に答案を記入し、それをスキャンするかあるいはスマートフォン等で撮影するかしてPDFに変換し、提出した。iPad + Appleペンシルなどの手書き入力デバイスを使い、問題用紙のPDFファイルに直接答案を書き込んで提出する学生もいた。

また、第1学期と第2学期の月曜日、本センター教材助手が昼休みに「ミニ漢字講座」をZoomで開講し、漢字の書き方の指導や部首の解説を行った。月曜が登校日であった「月木組」の学生は、教室からZoomでの講座に参加する形となった。

9-3 講演会など、各種の企画や催し

9-3-1 全学生あるいは希望者が対象のもの

全学生を対象とする講演会を2回（11月12日、2月6日）、希望者を対象とする講演会・交流会・ワークショップを13回（10月5日、11月4日、12月7日、1月13日、1月18日、2月3日、2月22日、2月27日、3月23日、3月24日、4月14日、5月9日、5月15日）、対面あるいはZoomで開催した。また、株式会社東急ホテルズ&リゾートのご厚意により有志学生を各地の日本遺産に泊まりがけでご招待いただき、学生がそこで見聞したこと、考察したことを卒業発表会で発表するという「日本遺産プロジェクト」も催行された。

以上の催し以外に、希望学生を対象とした課外活動「古筆クラブ」を設けた。書家の小林紘子氏が指導を担当し、手書きの古典文献を理解するのに欠かせない「くずし字」の読解練習を段階的に進めた。第3・第4学期の毎週木曜日にZoomを用いて実施された。

9-3-2 日本財団フェロープログラム関連行事

日本財団のご厚意により実施している日本財団フェロープログラム²²では、レギュラーコースの授業と活動に加えていくつかの催しを行っている。今年度は本センター卒業生による講演会（11月12日）とワークショップ（4月14日）を設け、フェローによる特別発表会を前期（1月25日・2月1日）と後期（5月17日・24日）の2度に分けて開催した。

10 おわりに

今年度の日本研究センターレギュラーコースは、日本や諸外国の多くの教育機関が新型コロナウイルス感染症対策を終了するあるいは大幅に緩める中、学生と教職員の健康を最大限に尊重する観点から、登校・出勤する人員の数を減らすという比較的嚴重な感染拡大防止体制のもとで開始された。しかし、「月木組」「火金組」のグループ分けが解消されて全ての学生をキャンパスに集めることができるようになった後期には、本センターは全ての学生が同じ場所で互いに励まし合い刺激し合う学習環境としてようやく本来の機能を取り戻したといえるだろう。

とはいえ、後期も登校日は週4日に制限されたままだった。実は、これに対する学生の反応はまちまちである。完全対面体制を望む学生からは不満の声が上がった一方、週に1日自宅から授業を受けられることで通学のための時間と労力が省かれ、時間的・心理的余裕が確保できたと感じる学生もいた。オンライン教育の一つの利点が見出せそうではある。

年度末に実施した学生アンケートでは、授業課題の量などについて耳を傾けるべき意見が多く寄せられたが、コースへの全体的な満足度を“excellent”とした学生の割合は例年に

比べてやや少なく、昨年度とほぼ同じであった。昨年よりも対面での活動を大幅に増やすことができたにも関わらず学生の満足度が同程度にとどまっていることは、完全な対面体制を期待して入学してきた学生の根強い不満を示すものといえるかもしれない。

4年ぶりに対面で行われた卒業式では、学生一人ひとりに一言ずつ1年間の感想を述べてもらった。事前に何の準備もないところへ急にマイクを回されて驚いたはずだが、学生はみな適切に敬語を駆使し、しかも自分の言葉で自分の思いを述べ、どのような場に出しても恥ずかしくない立派な挨拶を披露していた。感極まって言葉に詰まる者、それを温かく見守り明るく励ます者。一堂に会した学生たちが垣間見せた仲間意識は尊いものであった。日本研究センターは中上級の日本語教育を提供する機関であるが、このような意識が育まれていく場でもある。現場を預かる教職員の責任を感じさせられた次第である。

次年度からは、本センターの教育活動は完全対面体制に復帰する。我々は2019年末以来、突貫工事でオンライン教育体制を構築し試行錯誤を重ねてきたが、オンライン体制はそれ自体が望ましいといえるものではなかったかもしれない。しかしそのために用いたICTシステムとリソースは、急速に発展しつつある生成系AIなどの革新的技術とともに、対面教育をより豊かで効率的なものとするために今後も積極的に活用していく所存である。

(あきざわ ともたろう/IUCレギュラーコース言語課程主任)

注

- 1 <https://zoom.us/>
- 2 ここに述べた対策のほか、本センターでは学生教職員に対する定期的な抗原検査や健康状態確認なども実施して感染症拡大防止を徹底した。
- 3 https://www.google.com/intl/ja_jp/forms/about/
- 4 <https://quilgo.com/>
- 5 <https://slack.com/>
- 6 <https://web.stanford.edu/dept/IUC/cgi-bin/index.php>
- 7 <https://gather.town/>
- 8 <https://edu.google.com/intl/ja/products/classroom/>
- 9 例えば、全学生を9つのクラスに分けて授業を行った第1学期の「文法・待遇表現」ではそれぞれのために計9つのクラスルームが設置された。一方、第3・第4学期選択Aの「法律」は1クラスだったため1つのクラスルームを設置した。
- 10 MeetingOwl Pro (<https://meetingowl.jp/>) あるいはロジクールMeetUp (<https://www.logicool.co.jp/ja-jp/products/video-conferencing/conference-cameras/meetup-conferencecam.960-001103.html>) を設置し、PC・モニタと接続し

- てZoomと併用した。
- 11 本稿では「対面参加者とオンライン参加者が混在する授業型式」の意味でこの用語を用いている。
- 12 ここ数年で世界的に学生がオンライン授業に慣れ、他の学生が発言している時は自分の声を被せないなどのマナーが身についていたことも、「教員のみオンライン」などの特殊な授業形態が機能したことに寄与していると思われる。
- 13 昨年の状況については、秋澤（2022）を参照のこと。
- 14 前者のクラスは学生の人数が多く、後者のクラスは少ないため、この分け方で各グループの学生数が全体のほぼ半数となる。
- 15 同一グループ内のクラス間での学生の移動は数件発生した。
- 16 許明子・宮崎恵子（2013）『レベルアップ日本語文法中級』くろしお出版
- 17 稿末の資料（通常授業以外の各種イベント）を参照のこと。
- 19 会場として、横浜国際協力センター6階の会議室と同階のGALERIOを横浜市よりお借りした。
- 20 例年は書籍を全学生に購入させているが、今年度は希望者が各自で購入するよう推奨した。
- 21 作成には、WebKICのテスト作成機能を用いている。
- 22 https://iucjapan.org/html/curri_regular_j.html

参考文献

- 秋澤委太郎（2022）「2021-22年度レギュラーコースカリキュラム報告—アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第11号 pp.51-71
<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2022_Akizawa.pdf>
- 大竹弘子（2023）「2023年度漢文夏期集中コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第12号 pp.61-64
<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2023_Otake.pdf>
- 佐藤有理（2023）「2023年度夏期コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第12号 pp.46-60
<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2023_SatoAri.pdf>

【資料】2022-23年度 通常授業以外の各種イベント

2022年

- 10月5日 (水) 外務省訪問
- 11月4日 (金) 国文学研究資料館&IUC共催「文献資料ワークショップ」
多田蔵人先生による「日本近代の文例集」
- 11月17日 (水) IUCレクチャー・シリーズ
レフテリ・カファト氏 (2001-02年度卒業生)
「外交通訳と日米関係」
- 12月7日 (水) 文楽鑑賞教室

2022年

- 1月13日 (金) 国文学研究資料館&IUC共催「文献資料ワークショップ」
桑汐里先生による「中世の絵巻物」
- 1月18日 (水) 米国外交官フィリップ・ロスキャンプ広報・文化交流担当公使
との座談会
- 1月25日 (水) 日本財団奨学金受給生前期特別発表会
- 2月1日 (水) 同上
- 2月3日 (金) WeWorkでのワークショップ
- 2月6日 (月) ジェイ・アラバスター氏 (2004-05年度卒業生) 講演
「捕鯨と文化——映画『おクジラさま』を鑑賞して——」
- 2月22日 (水) 「カケハシ・プロジェクト」
日本語弁論大会優秀者・神奈川大学学生との交流会
- 2月27日 (月) 外務省中鉢俊樹氏、米国国務省ハービー・ビーズリー氏
(2006-07年度卒業生) との座談会
- 3月23日 (木) 国立歴史民俗博物館見学
- 3月24日 (金) アメリカ大使館訪問
- 春休み期間中 「東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産プロジェクト」
- 4月14日 (金) 日本財団ワークショップ
宇多川アヴェリー氏 (2003-04年度卒業生)
- 5月9日 (火) アラン・プール氏 (1974-75年度卒業生) との座談会
- 5月15日 (月) 久野明子氏との座談会
- 5月17日 (水) 日本財団奨学金受給生後期特別発表会
- 5月24日 (水) 同上
- 6月13日 (火) 東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産研究発表会